湖月抄

こてふ

29

[illegible]23
.M[illegible]K5

Freer Gallery of Art
Washington, D. C.

7152

胡蝶 并二 花以詞華数為巻名ト云云　哥　花園の胡蝶

をさへや下草に秋まつむしハうとくみるらん　胡蝶とたい

かゝわりて胡蝶とつけたる詞なり　花　初音の巻に同

年のうちなり　但是ハ三月四月の事をしるせり　又異の并也

細 孟月 愚按 此巻よりハ玉の巻の事ありさま語るによりて

かくてとりかへすに・細流云 新造の翌年なれハ也ニ云々 その春ま

川園[illegible]とりわけおもしろきよしハいくつもはなやかにかわりしを

わかれ[illegible]　花 [illegible]ハ[illegible]の時の此[illegible]とある

[illegible]の年の事なれハ一[illegible]のちハおほえとも也

[illegible]云々或一本[illegible]に[illegible]　仍加之　愚云 仍ハ仍覚なり 秋の[illegible]のなし 此以[illegible]

業之[illegible]の[illegible]は一年へぞこらかれ不快なるか波一段に

[illegible]へバ[illegible]年にれ[illegible]めりけれ[illegible]之[illegible]

そののころとりの[illegible]

孟 此巻よりハ[illegible]るに

まさつゝして[illegible]より

[illegible]とほくへし　[illegible]ぬ

[illegible]の里まハ

とハいまだわしるへう

[illegible]細[illegible]や金[illegible]に

ハ[illegible]してあるべき時

[illegible]此不のさまのあ[illegible]

らるれば[illegible]そまハ

[illegible]の花のるハ[illegible]まで

[illegible]と[illegible]しとおり

花[illegible]の里[illegible]いまさ[illegible]

やうよ[illegible]をぬりやとう

[illegible]とり師細[illegible]

山の[illegible]　細 雪の消[illegible]

時[illegible]行るども[illegible]

て[illegible]さとへくと[illegible]

[illegible]さ[illegible]秋とつ[illegible]

せ[illegible]此[illegible]のなかん

いそぎ[illegible]ぞの世[illegible]

花秋の装束也・やうこの

[illegible]の[illegible]のくし

[illegible]の人[illegible] 雅楽[illegible]

やよひのはつかあまりのほどのひ[illegible]

[illegible]の[illegible]つ[illegible]よりしてよほくしてまへ

わかれのいろなれ[illegible]のさとまへ

まつりやとえてゝさくくさ

[illegible]山の[illegible]の[illegible]のさまくも

さうらけの気色なさかりのさまくかんかは

かまくりくて[illegible]のかまよりくめい

[illegible]のつらくを[illegible]いそぎさうぞ

[illegible]のまて[illegible]くせ[illegible]目[illegible]

づかさの人[illegible]て年のさくをしうゆんとさ

ら上[illegible]おかさ[illegible]中[illegible]此

ば里まかりまとうの[illegible]川そのもと

の人く楽をつかうまつる　細花　孟し女君に〇かゝる園にハ常の楽をも用ひて
のまゐりけるのハ
まづ花ゝよと秋ぬよりしあらそひて
つねにおほくてうらうらる
細 御じふみの使の中宮に
と中宮ハおはしまさせずも
かうつらるゝに此方へ御渡
あまりのいまさうとく若
の中宮ならではいかゞうよ
御使中まてもじゃうやうを
く御心つかるゝ御心ざしを
つけかしてうべくきこゆとなん
きうの女房たちの
花中宮も此比御里に
おはしませどかろかろしく
きやうすれバえあらずと
しれるにそせめてのまゝ
に女房達を舟にのせ
みて南の池づたひの御前
の池へこぎよせさせ
秋中宮の女房を舟に
のせて紫の方へこぎよする
南の池のうちのさかひ
細 東中の町と南の町のさかひ

（細 紫上の心也）はげましきこえ給へりし御かへりも此比や
（細 源の心也）とおぼし。おとゞもいかでこの花乃
（秋好中宮也）をり、御らんぜさせんとおぼしのたまへど
ついでなくて。かろらかにはひわたり。花をも
もてあそび給ふべきならねば。わかき女房
たちの物めでしぬべきを。舟にのせ給て
（細 中宮の御方の女房也）みなみの池に。こなたよりとほしかよはし
（秋好の方の池也）なし給へるを。ちいさき山をへだてのせき
（紫の方へ）にみせたれど。その山のさきよりこぎ
（紫の方の釣殿　細 宮をへだてし）まひて。ひんがしのつりどのに。こなたの

ものわいの漕あるく
ちいさき山をへだてのせき
花舟までまうれたるひとつのかまへ
こなたのかたはきんく
龍頭鷁首　河　鷁又作艗
淮南子ニ龍舟鷁首　註　高
誘云鷁ハ水鳥也画ニ其象ヲ
着ク船首ニ以禦ク水患ヲ　云云
細 前よりかゝめはらくと
えもいはれ事也　鷁ハ水を
あそびくるに往もろ物あり
鷁ハ風をよくしのぐとて
船首につけられてはべり
めの目ハ雅楽つかさの人
めして舟の楽をしあり来
に龍頭鷁首ニ女もとなどの
もしる也　楽は舟の中に
やあり　舟に楽するハ一段也
是ハ年々ちかのめのにし
後の夜ハ中宮の書に催経
に紫のしもてなし催花あり
しるべし
中島の入江　細 前へつけくる
はじ山のあたり中島の

（細）中島のかくれにこぎよせられたれ
（細 紫上の方女房宗との用）わかきつどひあつめさせ給ふ。龍頭鷁首を。
からのよそほひにことごとしくしつらひ
てかぢとりのさをさすわらはべみなみづら
（花 唐人のやうにおかせらるゝ）ゆひて。もろこしだゝせて。さるおほきなる
（孟 仙境のやうに）池の中にさしいだされたれば。まことのしらぬ
（そうさうし 唐めきたるよそひの舟なれば）国にきたらんやうに。哀におもしろく。
みならはぬ女房などハ思ふ。中嶋のいり
（舟をさし）えのいはかげにさしよせてみれバ。はかな
きいしのたゝずまひも。たゞゑにかいたら
んやうなり。こなたかなたかすみあひたる

池のかりしとるくらかと
おもふゆけてつんのもし
細 花色の衣と書も面白
し。紗くし是上の細にあはれ
かの里はいまくかゝりぬは
やしうけ此歳中はおち
かをらぬへの細しぞの
取いかよりくさくろへの
えて此比等の花ハかるく
うらくらくと見ゆべし。
弄りるの若さんの寿の
らくわかにあり。
廊とめられる 細 文集ニ
繞ル廊ヲ紫藤架夾ム砌ヲ
紅薬欄 奈中吟
波のあや よりんとましへ
山吹の色よあやめ咲さ
る春風や池のおもとと
錦いとくらん 文集池有テ
波文一形ヲ開ク花面白ク
つんくく波のあやよ驚の
紋とうりすせうらとこ
あり。かの面白るへし

構だかしらばひきわたさるるよ掛らんのゝ　盛笑止の師説也
さハきらぐしてやられたくなしやきまゝし
くら衛殿とくれぐら花もえきもいでく　師句　盛白師読つく
ぬ白ひとちしくら。池ぐれさくらすきさ
くら藤も今さかりよ池くあらぐらくとめ
ぐれる霞のいろもこ草やうよ色しく若池
きかさましそ池のあよりげざらし
まろやまふつきさ。累よりくかれてゆくらし
さきかわり。くずこらたのつひにとどまり
かれどもそひつ。池そさ散れをさらひ
てよひらふも一の波のあやよりんと
まじへさらあそび。りのくきやうふまうくこ

三

風わけて 細 山吹のさ説ハ
近江こく此所よハ秋にり
もみてもと此寺九ハ中
宮の方丸人く南乃
坪どのくくの寺く伝
まいにわしく推しりは
河山吹歌一箇近江坐云
蜻蛉日記石山よまらり
てくるとていかゞ時
こやアそあしの中より
山吹のさえみどしうけを
濁りらえ 師 咲いへる
さ物られとも山吹のえう
ておもしとらあり。山吹の
さらりの面白みありより
らくと山吹ゑ咲りしとるこ
とくく
春の池 掛 井手ハ山吹の
名所なれハおくなどそめて
いへり 盛 此説よし
あめらん乃 河 蓬莱山
負亀背也 文集不見
蓬莱不敢帰童男
女舟中老

らま用しさむまうしゝるよみるつくえをもく　蛇足の故書ん
じくハ川べうかりひつく。田とらしれ
風わけて浪の花え色えぬてらや　夢遊落
あよしそろやまふつさのされ
同
春の池やあそでのりそせまりらん
まろのやまぶきさくもわへる
同
春のよれ山もらぐじかのなるらよ
同
晃をねるまはなるまのさらん
同
春の日ありくまさしてり毎ハ月の
雫も花ぞらりけ。なじぐやうれたなき
しくもと。我らくよいひらしつ。
りうさもぐくらん里もわをれめべし。

四

秋香し 細 文集の句を引歟 蓬ハ不老不死の薬ハ此山に有と云々 何ノ則ニ 不見蓬莱不敢帰とも也

丱女舟中ニ老ヌとあて 蓬莱を求もとして舟中にて老たる名をのこさんとなり

春の日のうらゝに 抄 眼前の景色ハうらゝかなるさま也

行方も帰らん里も 細 桃源をみるかとし 愚按 桃花源記云武陵人捕魚縁溪行忘路遠近忽逢桃華夾岸 文云 河 續斉諧記云漢明帝時剡縣有劉晨阮肇二人共入天台山採藥迷失道路云云 愚案 是も仙境也

わうじやう 河 皇麞 調

細 平調楽也 私云 平調と用る時の調ハ 不審ハ似たり 平調の根本ハ金の音に於く 陰陽平調ハ呂律相兼て天下を調ふ此時ハ秋冬の調に用之云々

心にもあらずつり殿に

さしよせられて 細 用意もやらるゝ

宮のしつらひいとことそぎ 細 此所殿の荘厳もせぬ体也

所是ハおほやけ

わかき人〴〵のこゝろをうつすにことはりなる水の面になん。くれかゝるほどに。わうじやうといふがく。いとおもしろくきこゆるに。心にもあらず。つりどのにさしよせられておりぬ。こゝのしつらひいとことそぎたるさまに。なまめかしきに。御かた〴〵のわかき人どもの我おとらじとつくしたるさうぞくかたち花をこきまぜたるにしきにおとらず見えわたる。世にめなれ

花をこきまぜたるにしき

つくひのゆかりまでしく中宮の女房たち人ゆかりの 河 又ある本に世は御簾などこゝろをすませてし

ずめづらかなるがくどもつかうまつる。まひ人など心ことにえらばせ給ひて人の御心ゆくべき手の限をつくさせ給ふ。夜に入ぬればいとあかぬこゝちして。御前の庭にかゞり火ともして。みはしのもとのこけのうへに。がく人めして 細 堂上にて楽をする也 上達部みこたちも。みなをの〳〵 細 楽人ハ伶人楽師也 ひきものふきものとり〴〵にし給ふ。ものゝしどもことにすぐれたるかぎり 抄 堂上よ さうでうふきて。うへにまちとる御ことどもの ハ絃をいふ 琴琵琶の類也 しらべいとはなやかにかきたてゝ。あなたうとあそび給ふ

さうでう 河 双調

細 其の比へうれしく 其の比へひくきハしらべのごとく云々

あなたうと 催馬楽

呂なり 安名尊ハ名也

さうしともや云々

[illegible]

六条院法門之 [illegible]

立剣之 [illegible]

声楽(せいらく) [illegible]

[illegible]

細 律、呂(りよ)…… [illegible]

黄鐘調 …… 平調 …… 律呂也 [illegible]

[illegible]

細 楽の声 …… 温和 [illegible]

[illegible]

中のとりひよりえらべき
細 此国に官位も残し
さんしふにはりとみ
其くどもとおほく人の
しもく孟 わざと哥の外
を勅撰にもしるとて
らし 同くまた風の中
にありてひとりあつかう
らおはすのこともあれ

きうとくき 細 うらさくと
ざれ与御と要なり
分かけるしけるよし
いそからくえ給ふいら
まふらんかや
此くにも此かりし後らよ
く 細 此巻の中にある
おくらゝさとへのこれ
と連く御わりしと
しくそし

しとゝしおぼ中の宮ひよりまえぬべきわ
きんじらるまじとあめくしくもうらにしと
のらうとおもしろで同のゆかりしの人中将は
どもこぼらべかり。其わざのまへらとさし
こゝかりしくらさのくさもうとありく。
あのこゝせでたら。ひらうずとめくるまびあ
つびけらてゐまはそれたるこのふかさ
もいとゆうそしらびれしてふらのく
れをぐして御ひさうどときまへる涙さ
御いとやし。ゆらどもゆかおもく酒。られて
三さまはゆかりとて。せりてあらそでかとい
くらうふれりそうしけのつゞくよろしう

細 此巻と例によりて
をうしく後撰よりおもり。
そうひも知ね文の源さう
ちくは物語よりは多き也。
義花ニ輝也と花其人
文八微ニ源の御娘と云
やそ其人の内人とは後見
つき御め。にありては中の
のみとうらしよう。まで
为花と為の例にいそ
つらうく
みあつくずし
細 為の花の
ぐさしき御 我着しいの
ひよしの事為いうとは
にくずしと心ありそれハせ
め心くつく花今来哥
ゆえに連歌によりうしませ
んかうがかすこし。義経
そてもしれまよと八ゆう
づきとさしのよせるく
御つらうえらびでして
夜花とくずうてたしび
さうどん路ともかりそ
りたうど花とそへて此く

てうやくのまつく。こゑさへ人にむらしてもおはりりく
ぐるまいとしるくいかでかしますらひのよ
むしろ花のゆかりにくるとあかられどしよ
らよつくらい人君ややはおしけさしとて此くに
たよ此おのずつくしとそきれのへいとへいさ
うほくおちさまに
かちよら給ゐるけうへしやとこのゆうは花
のおうりとよちこうそでよよどもちりよとぐ
御見あへでえうらおかれ路めうてげさのれお
そびおりていと面白し。くよいね文のゝごとく
きかうのそでし御見ありくりやかてまさぞ路ハ
てやもと気そりつ。ひまなくなるほどひよ人あ

の春は盛りてまつりまうさん
からは身と 細 法華を主とし[illegible]くとくにすゞ源の御かし[illegible]給 此からは
身とうけつべきことを捨て死のかうりとまうして[illegible]を忘のため[illegible]
ようみまふなり
けさのはゆそひ 此 此頃まで紫中らしめしれうる日の時よりかけさこしいりの紙[illegible]
しろしめ法理之日く
中夜の法ど経 細 二月八日より[illegible]べし。二八月よりかうく家く之別れ大般若とよ
むくし 向 季の御読経とのゝる[illegible]状大般若と論供せらゝるよし 義 私紹弄 中行事
私抄云季御読経事。四ケ日。二月或三月。日時。僧名定ま兼日被行を云四ケ日并二日
有引茶并三日有御論義。秋ハ季定ゝ行まし
目の[illegible]ひ 哀 [illegible]やまれり。別よきつすべし 哀しうとかうかうのかるの哀常衣よ
[illegible]しゝ 細 東宮かう河と花宮よ彼をうく貞衣ハ寛衣く東宮八日の[illegible]
なりて此中おりき原。 細 源よ
ひがれく此中文も一段
[illegible]也

かへでも功ながらうぢまうりあるは、まうでしかど
とこのふむまの時[illegible]らうよかれわかるとあり
あり経。中かくの色とくじなうそてまうりて
これつきさゝうのよ最上人かぜもぼうる
くまうる物日くハ中くの比[illegible]かうハよこそ
てあかれかそやむくとよくいつう

つゆ[illegible]御まかり[illegible]の御人おほけ[illegible]さし[illegible]ま給よ
花そてまうりしともかくりてふりよさうそさき
えけるわかる八人がうらあうじ[illegible]
そくのへ[illegible]せましとふ[illegible]のゝの花
ぐ見てもさらくとぞさて[illegible]ふ[illegible]のゝのわかこゝ
やまおろしとおもしさゝるれのかさまいりめ
しう世よねがひとつくさせまゐらられ
このほかへの山、さわりなくてさかく。[illegible]へる
物の調く風吹くもの[illegible]もちしうら[illegible]
まづふいとうらくなとれたく霞のまより
ちらかるいいと衣まる御めさそて[illegible]
まさしくひくかなるも[illegible]れども[illegible]

きのふ人の 細 [illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

めづらし 細 花瓶下なり
花胡床と日本紀にあ
ぐらとよめり。楽人の座
に花胡床をたてまつる
とみえたりとかくべし
ぎやうがうの人
孟 ぎやうがう 蜀
にまうけてまゐらし
唐には天子の御まへ
花ぞのゝ 河 女房
まつりけるのちの御
こゝろざしあまりあはれ
しるす 細 秋好中
宮の秋を立てゝ給ふ
こゝろざしは 花園の胡蝶
此蝶をいつくしみて
あらはし 御下書
秋好宮へ花園の胡蝶
の御かへりとてみるに
みつからにとて
細 昨日の
昨日の女房
思しる女房たち也 花中
宮の女房達春の事を

かりにあぐらどもをめしたり。わらはべ
ども御はしのもとによりて花どもたてまつる
ぎやうがうの人〻とりつぎてあかに
くはへさせ給ふ。御せうそこ殿の中将の君
してきこえ給へり
花ぞのゝこてふをさへやしたくさに秋
まつむしはうとくみるらん　宮かのもみぢの
御かへりなりけりとほゝゑみて御覧ず。きのふ
の女房たちもげに春の色はえおとさせ給
ふまじかりけりと花におれつゝきこえあへり
うぐひすのうらゝかなるねに鳥のがく

御返りなりし
花よりれて 細 ものがたり
西宮左大臣の御秋をば
おもひしりぬ
鶯のうらゝかなるねに
細 花鳥鶯の鳴声
あさき鳥の楽によそへ
迦陵頻 鳥楽 迦陵頻也 鳥ノ調
でふりまして 細 蝶は日本
楽に花鳥の急に舞
れて鶯の鳴も鳥の声
鳴く蝶の花に戯れ
もおもしろく
蝶の 童
の舞 蝶の
孟 胡蝶 蝶楽
霓裳羽衣記に
李
やうなり 孟 急日に
しろきひとかさね 師説にさ
ての衣をかけ
給ふ 細

はなやかにきゝわたされて池の水とり
もそこはかとなくさへづりわたるに
きふになりはつるほどあかずおもしろし
蝶はましてはかなきさまにとび
たちて山ぶきのませのもとにさき
こぼれたる花のかげにまひいづる
宮のすけをはじめてさるべき上人ども
ろくとりつゞきてわらはべにたまはす
鳥にはさくらのほそなが蝶には山ぶきがさね
たまはる。かねてしもとりあへたるやう
なり。がく人どもにはしろきひとかさね。こ
しざしなどつぎ〳〵にたまふ。中将の君には

一かつけ　河　腰差禄絹のこと　細　花　禄之絹給らしむるを二腰よりさしてまかつる也
かれこれわかり
首のかそなかゝへく女のさ
うぞく　花　女の装束とは
装束一かさねをいふ也
一い裳と袴とを唐衣を云
そうを裳袴ふつうて云也今
のせみと紫上の御給ふ
ど八なえく
ねよなくねつきこ　細　引云
宮花の梅のかつえ子薄
のねよなくこ川べきく花
ともろ代時ゟこゝこと
の出ゆしかうしまや
並防の八掛ろきの社
ろ二様よるくそくよ系
さうつるとく
こてふみそ　細　據ようそ
かれてまりとも系ア安
らと所やん山吹八ゑ子
子云めくこ心わりて済
をハまいらさきく
ふくれうけらうどとも
細　薄上又中宮みじう

かゞのわたるなかゝへく、女のさうぞく
ゆげのふたはりくさの（冬の御方）ふる細長そへて
めぐくまん
（秋好）こそふみもこそられなきしらんおほかて
八宮山かきとつゝそがらせは、とぞおりけ（ひとりごと）
ならくれらるゝらうしどとよやいのこと（とられてよ　夕のちるに八仙合なるく）
もらぬおやありきん、らふやゝをきて
ゑるおゝらつきどとるめれ、わこし（秋好の女房宗の物とてるよ物がけ移ひしとく）
やうのこりの女房達、宮のまうられてき
あるとくうのみどとをうせまふうつさや
うのらしとうとれでむつうしわるゝく

ゑ、か薗門藤寄さきんへて緋りあくんぞるれば身一なぐくも脱しておくべきらしく（腰さし）
へだてられたくまさき八尾ふ花といふ物てやふやらハる三物しもる法と称て出ると
見きられよよらうしらのまちのれ寄よいへしもあすきてく（上鞆）
まとや名　細　此は毎よ寺のの中宮の御方の女房達にもゝらしうれぞいみうしと
へふすそ若子他と即　紫の方よりとらり物わりしるるし

まつりつゝあやしくものふるまひさまにあるそ
びらけくさゝらやつまくましくしはのへ
ばきうふへ八もゑぶいつりのふへおすき
からしてゐんとるまうるまるはしゐも此のし
しのふかし（咲妍君紫上とも）の盤のれりきとのうかうらん
ゆりのれ對龜（紫上へも也）のうらハあらうふる中て人へ
しのふ東のうき此らゝらの（紫のこ）るや、おさく
そいふをおく（細句）ちゝきいとくらう、あり、
あうしそうらでんとうて、人のな

西の對乃　細　紫上へ八端
寺の時ともろまろく
とらひうて絡く
おきか心おり〳〵ゝや
細　おさくもいつまでとわ
らんとえるを後まわり
てさしさいてらうつるき
とむしろくるなゝのこ
りうまさや　わかさなせ
あるらいの後くとも
又あさうつもとらも見奥
ハあらえよさらとそく

ねんじあり 花 是ハ和らかの(?)心みれはかけらさざるおもくらの繝ならかうきへふらへう
くおもくも兵ふふもかうわざくしらかうからふりきハ人にあざむかつてやらけらる
うつハ考さて又あるさきハかうしく人の心ゆりハつくるされハえらかれらからうくし
さぞうつく
ましさていらうわり 細 只打むつかしくてゆるくらうらくしきを

まくらかにゆやかう
細 盤渉ゆもえてうとしと
ゆかりもさく 花 蜜通のん
わらくきれども 浅の中や
まよえつくせやせまりし是
蔵人中将ハ事うしはらく
細 玉ろかくの方うくかへ
ふつもそうあた夕霧ハ
浅の見宵のあやそうひ
ざし侍つく

つゝましとものし給ふ人の御さま
まばゆくつくさめもうれしうてまどろえ
細 玉かつら 並もう人多之
まうでうらうし給ひしいしおもくこの給。
野分にハ源の玉かつらの事を定しとみえし
されどゆかしげ ゆかりわけなゆかりしきさびしくべ
くもおぼろげにうれそうらふをとすしこら
よゆやかうそうおもひれうてうろやをうらん
細 内大臣之
ちゆかうわとこしとをやとつくましあやしく見え
しまうわうくるとおもへ 顔の中将 夕霧之 いとそうし
けぢかうく 玉の方の之 らそのりしるみしならをとしりて。

さうべきゆかりし
夕霧のあかさ御息の見
宵とゆかりきとんてく
ちうらとく
内の見やいとのく 細 柏木
うどらくえ ハ実の見宵
ふゆれハ文字もしへんび
まうんうまつて
ことのこけわられ
細 花 玉鬘の君ハ内
のゆかいとのつたまをとれ
ゆへんゆくいとしゆりかまて
ゆくよられどもしうきて
むとをうこの衣よハお
らうで下心くらうしく丹
ひまひてうらつて
われハ同しうわらうと去
らせゆかりしきとうひ
まうらく
あきうちもかうし 細 実の
戴よ見ゆらつせ衣かり
とさいとざうよ涼よりく
ともえや給ひかく

ゆうつくしさつうしゆかし 給ふみどもすりも。女く
あくまつく
つまりうゆかりをどしさる人をほどつく人でも
ねくめとく
そうりきこえてうれハ中将にすぐくしらそ
ゆひもいふ葉の 内府之
あひもうかゆかの内の見宵いらの乃実らら
春 夕霧ハさう乃寺をもうてく
いこれるにひられてやうけよ気色ことを
玉鬘ハ夕霧にいうよ
まびあうく給ぞうらかれよいあつ
玉くかとのあかされよハあかつてく
でもふるふなうするへ出まうしの竹やよ
内府かく
うもえうれそようかしうれとく人とんさくよ
りけあうれどうあるうるもあらしゆかりの給ふぞ。
細 源氏の人々よ散とさるゆく
ひかへよらう給ふけゆの中ゆかり給ふむけ
あどうつうけよあうやゆりのゆかうとかくかうけ
細 夕霧のよまか下ハまられとく
れどもおもうえのけうひよいうくらうくゆかて

これハかどめかいくろ
孟 夕顔ハ桜よりさき人よ
てあかりしがハことし
うすきとく

おしこしく　細 むつく
の身へ方くまりの文
あつけりされハとて
と源の御かたらせ
うつべきうハ　孟 抄書
ともと源の御らんして
うつべきうハ忽すおまぼ
あれとむへそのうこ
まかく

細 四月ころめつく
てられハかどめつくろ承そひきうこころあつ
へのいまめしうおくらきれうころかひ
四月天氣和又清 そしの気色なるらんおやちうそこえへり
源氏の御身し
とうしおうしう紙のとやうよおかりしまとハ
細 西對さ
しろげのれあそびよろしとて源よ對の
おろくく
れうすよ人てのれおとしげくなりのと
源のかくまりつく　玉かつらの方つく
忍しとくゆりしうゆかいつく。ととされハ
源の給つれらんじまうべきまハれ久つと
そくのイときてすりいるよしすりとう
お笑らそ　孟 らつれへいうくえきく　蛍在アつく
らとけむくるりいつよゆかいつくり無ア
えりて給もうきまく
つのとやの御ども　つされりより　さうとひ
源の
じうたとうきあり給人のくるかれ久えと忍つ

ちうこまりつぶうゝまかり
細 無ツ女ハ源の御連
枝とらひなうしくもの中
ゝても一段と御らうく
しうびあへ代・好色の方
ふくハつよく源よ公諭
あいなさうの人かま
て公のきはてうまそ
おうしうれと源の宮仕
そうしもゆくかく。人
細 無アつきもきうし至
てハ猶まよりしびくべき
ぞかめくん女かへ公よよ
よそいさハもしかれ
とれまり

源の御
んじつけて。さやうよえらくひきうかなひや
うしるうくとりかしむるうかあまきのことさ
らの御中よ此ならとならんうてまよそりわさ
蛍兵アつく　ひきの方ハ源よ給てもひしと
てさひしよ。とそかやうのすらけしとるん
つりうへそそさひのひくやさうし。え
よのすきよりくすきまくるらくへろを
孟 源のかゝつら
かおりしう義がもゆかゆかくれるそれ久へ
のまつく　蛍兵アつく
アるりごせのしまへすうしをゆへあらん兵乃
あのえこうり用りよおまきえの紫をとりえ
凡例うううこれつら
えべきさ人てて世よ好りしね。いとうく紀め
子ん人の給き海でやと。わうさ人へハめつく
むらし
まひめべく学をしおつしせまへど。つまり

[illegible]

細 [illegible]

伯父之 [illegible]

[illegible]

孔子 呉音之

[illegible]

是 [illegible] の兄弟 柏木の父之

[illegible]

柏木之

[illegible]

号岩漏中将也 [illegible]

[illegible]

細 [illegible]

[illegible]

源の何ハ細女の歳ハ盃 [illegible]

[illegible]

細 源の [illegible] 盃 [illegible]

[illegible]

男の [illegible]

女の [illegible]

[illegible]

りくさらくえつく地わかりとくへ師今やけらい家うそハそるかうしきんりや
思按并の手わよこそくるう朝と此けやらくるらしむ地わしりんといふうへむとへ
まうてまりく
わうぶと深かくて　花此段ハ男のきをり花蝶まとつかて文とらせるてもゆると
女の花をす又終うくあへしこひへろるに甚男中あくんぶりおひ志かあるとわり
みもまく斯志是よりも女のをわらくしかるうく　細自然の情を知るとをせ
ねむえれりうちひらるてくえやぬねうけしまあ具物く
物のさうりつりのたまと
いかくりと口しくえるす
ぶり　細ちぐとぎりるに
おうきとざりるまつてく
悪くるさん八段の跡あり
あへしぶわらくあへあう
ひらうかましく拙判あへ
綱く
まぐて女のとれよりの刹
の女の名稿とののあふく
そのつりわかづさるうれと
細えそくなけふさの杖て
るうくらのあし思按此上
台わくとしとさのくは
うん杖くそ
えあ稿　細　気かマ文もし猿
思ふと二人なり
物わみつへる紙さりつしし
細　合久うるし恵る紙さ
まくけるとさかやくるる
鮑つりのすふべくさまあ
らはしく
又あまりのくれじえつね
お此二人とハわまり信る
くりそかしまふべきるす
うつねとし人ゆくにれ定
れあり云毎まくうつりよい
かは氣のさればのうお判まど
わくわしくまわどの作ら
まそへ作へとかふく
らうしもからへまへ　孟功
当とつくもへ八信と上
くさよりく
るそしくの　花なそして
ハ妙りて紅柳らしまて此
ころの花のきこハ四月なれ
ハ卯花ぐるるとつふかや
卯花とつかハ妙りて白う
らかんぐさくしあうひく
うるしハきかひのるるや

をおり、ちうさうてまうすれゐたく
ふおんぶりのくさうりづうりの名残ぶりらじ
とくよ、らうとうちうくうろもうらうでわ
思ぬべくりり。のしれるんとありぬべき
もぎやらぶとへくく女のまれつくるとびうる
のまてよりのく衰もちうがわれり
しきらしとももうしらんるんそのつきとり
わぶらさけしるべうと綫えうるいゆ情まくうる
ざりごく綫うらわかうふべくさみもわくれ又わま
さりのく僻じ志うしぬやくるすくんも泊あり
さ海よさづうり。もうそしくうりしへろう
ざうのとももさよえてさうびいておも
わさるまへらうしどもうぞへまへまごさうし
まへが思いしらうるむさそ妙そけうそてるめ
いと妙しげるうゝちそしとの情そるりよ此ご
ろの花乃いろなられらうちうさ。わくらんひけ
おうくいまめてそ。りてあしるぐもさは又
どゝるうびまつりしあうりとそうくとあう
まぶ妙やしりわうらくるのとハそしまひなれ、
人のありさ囿とうまうりまふまてにいと

さまようなよびかにけさうなども心して
もてつけ給へれば、いとゞたらひたる事なく
はなやかにうつくしげなり。こと人と見なさんは
いとくちおしかべうおぼさる。右近も
ゑみつゝ見たてまつりて、おやときこえんにはにげ
なうわかくおはしますめり。さしならび給へらむは
しも、あはひめでたしかしと思ひゐたり。
さらに人の御せうそこはきこえつ
たふること侍らず。さきざきもしろしめし御
らんじたるみつよつは、ひきかへしはしたなめ
きこえむもいかゞとて、御文ばかり
とりいれなどし侍るめれど、御かへりはさらに。
きこえさせ給ふをりばかりなん。それをだに
くるしいことにおもひたるときこゆ。さてこ
のわかやかにむすぼほれたるは、たがぞ。
いといたうかいたるけしきかなと、ほゝゑみて御らんずれば
かれはしふねくとゞめてまかりにけるにこそ。
内のおほいとのゝ中将の
このさふらふみるこをぞ
もとよりみしり給へりけるつたへにて侍りける。
また見いるゝ人も侍らざりしにこそときこゆれば、いと
らうたきことかな。げらうなりとも、かのぬし

(頭注)
細 …田舎び… 義同
細 源と玉 …
細 太夫監 … 源氏の …
細 花 源の …
柏木中納言の文 …
細 花 花 孟 … 小女房の名也
河 見子
内府之
柏木之
孟 柏木中納言 …
師 柏木の浅官 …
孟 源詞

とのつゝしをひおつかきつ
細 実父の見殺されたるや
異 おもふこのおもらひて和
つきとくされなきなに何ひ
せうらうりんとのさせう

あわら宗やあらんとやて
あり 細 やまめしといゝや
思ひしきくいやうにゝし
こゝにもとも侍しるゝが
さうらんもいかの歎かれて
まんやおしきさくれり
おおろかいらまかりか
ひとくさまへんとし
まうこうつりくたく
お 孟 懸想せしき世のさく
きそまいとまひらく給さ
まりそれからの致のあて

しきりとどいひてさはらしきみめ
細 人の疾姓どうかり
ん。さてもこの人のゆかりしよう/よう。あく
拍木之
内府の
まへしをあゝぶみまれさそれゆかるれ。さ[illegible]
細 実陰之
まの申道し
中ゆるしとてえげれるう人のりてみのづ
拍木のし
うつゝたひあれそうか世をしうきてあれけらえ
花 わくらにもさ
のかうし 師見出すとあらうかいはいかにもとゝく
人まいかにそでことかいひそれしゝかちめと前
あり、あゝうきらはしなじ。えんみもしらそさ
細 源のむつかしさの給仰し
給ひぞうてかやうやし。世中のとも。かず
まのうく
よ家やあらんとや。もおもいてしは(?)侍るよ
孟の又内府へ
ちゝれなりは給へとさも。さうこそうわかくし
と侍とゑまさ侍らゝまゝら。もうへまへる
れ中にまよよ給へんこといわてとまつひめで

つくあれのしうまき給ひ人よりのかく
細
らうら年へきつれ
逐わりさておゝ細人ゝしゝ
程世の人乃わりかのことに
細 彼はおくま(?)すは人の實
まおゝしての心らめ実父
よ者をとゝへさらに孟曰
に忽かとうして進退を
さうゝめて汲よいあゝめに
おしさもそりて施し深
のそのあく
なおいひとう 細 叔誰人か
うしゆりのいよ実子いま実にて
人がらにうちよくゝゝ乃
君よくうけるよ人の心を
アうき風を源の心にさせ
なりちまてく
みつうし 細 右人也てか
け細く 花 大和物語 陸 の
日記ふもあり今昔を
よのにうのんてあい 花 らん
あらさらのゆかりうそ人は
のゆゆてあらうとふ人かな
いまくるにりてもいかゝかま

細 文太政の方ハ継母の御中かれがれなり 孟 かうかうの兄弟
らうから給ひしのいへのあらゆゝそきさもまくまへ
うるゝとていへんごさとうらくつさつぐも
花 実父ハつまを
捕しめらうめしとあは(?)代ゝ実ハひとうのあ
まよひうるれども人がらいとかいふうちまうぐ
めゝかひいまに前あわきゝとうくらしめ
うどくかふかくげゑらうなりのすかり人へいかど
るんうどわまゝく実ゆゝらやうゝ宗んなと
ハ 又 直
はおくげゆうてまかといろ御らんへ
疾飲の心あらんへ
いとよりてあゝぶりてうまりてけらそくんを
らしうりようらせあゝりてはひうゝまよ
れぬべきにしゆきんとのづゝしいぞておあへ

あはれなくしさいはなくてはてぬるこそ遠きわかれ人の種もえらびくなきつひのはへ今はあはれ

めくへさらすなり
けんづいはんあるべき
細てう西行がいの所とも
かぶりのはやくおもふ
きこしめ給ひて出家
よみ給ひまゐらせし
天暦八年つたへのこし
けふひきそへし上
細 此和歌ハ物わらふとし此
給はぞれど磨りそろ
うしはおくづくわに書を
くば給の筋しえハ紫上
の崩ずる給ふ源の御弟
まはちかうしはかなし給
く師 わびすぎさうるを
よさめてたきうたを
けるにくそれもなし
とそのめ人ハ無常所乃
かりとうつの人へも
やまべられも又さもら
ゆべしし源氏の室ふく
うき海の 細 此紙すハ

うき様ものけんづいはんおもふべきおもひ給ハいとし
つれ人のいろねびすぎうるをいとひ
ぞそしよりしむるれどされもひらくまし
づいしきがらさもあくいつしうれいば歎
くまおもんかかれむとゆりひまさめる給ふか
うちぶ海のしるやなとめをさらやり
よ親そおよ海そてりうつりぐさうし
まれどさてぞうれけしくひおまもわすす今
いさどうおまでとしもとげんよいさい給く
ぞうんゆるそむりしぞ海はなどくへき
しくぶしおるのまへけらはあつさうかん

されたゆさるをき所さしまるはあらつやすずれハ我そ久ありまりまなは念すもん
くん侍てぞのうまへし
海へうりてい給 細 是い給ハ分なり 師 分别あつハこき年れなりとく
洗ふよあつさうんすへ 抄 玉鬘の海足を尺ゆかさ人るすハんかるしう
あふるよも思ひたつ侍く
よりろく 細 花 是ハ和
ぞくの花苔こ之大和
好君よ離ま侍り又君
まハかぐさいて恵ありハ
ぞさそく歌さぐしへ見収綱
しのあくり
世のよしあの後の歌よ
細 後の歌乃ろす世俗よる
く孟源をのられ歌とた
引てみ世とし云んく 抄 且
のうすひとハ世俗の諺ぞ
こりよりこそし

ハうつぐうしくおど。いとまおやめふく
ゆきしまへいぐうしうそれいつへこそてえん
しくとゆかし給をす。いとくしくしさるも
うしそしゆかしておもよこしもさひあん侍く
ぞりけり猶じよう。ゆやるとへこぬりのま
すくひ侍てどもりくとさうすまへしれどもあん
とこそし給さ海のいしおかいつくれすれ侍る
こゆかいそぶすへハ世のことひの乃う浮や
とぞれをゆかしくおまふうすね心ざしのお
もとめくりしそ給さんやあさまふらう

すゞろになげかれて
哢 源の心にけさうはあ
れどもさすがにすゝめい
でふくさをはらうげふ
まうす物なるべし

ませのうちに　細 花 哢
みづからの君はうへまでを
のかうにてそとはおもはぬ
うくはたりなふべきなり
わくそて下の詞にかゝる
かうへはしそうしとぞ
けくるなり

今さらに　花 生ひかし 花
るんと実の親をさとし
細 我かゝるは源を実父
にあらずと実の根をし
とはあやしく思ふといふ
哢 とのか世にやとあり
と父のゆかりなりかし

らひ給ふ。母君のこしへはゆかれは
えしらいで給つ。宮ものをはゞし
きくませまへにしらぬさまなれば、すぐ
ろにうらなげかれて給ひ出給ふ御まへちか
きくれたけのいとわかやかにおひたちて
うちなびくさまのなつかしきにたちと
まり給うて
ませのうちにねふかくうへしたけのこの
をのがよゝにやおひわかるべき
思へばうらめしかべいことぞかしとみす
をひきあげてきこえ給へば、ゐざりいでゝ
今さらにいかならん世かわか竹のおひは

じめけんねをばたづねん。なかなかにこそ侍
らめときこえ給ふを、いとあはれとおぼしけり。
さるは心のうちにはさもおもはずかし。
いかならんおりきこえいでんとすらんと、
こゝろもとなくあはれなれど、この大臣の
御心ばへのいとありがたきを、おやときこゆ
とも、もとより見なれ給はぬは、えかうしも
こまやかならずやと、むかし物がたりを
見給ふにも、やうやう人のありさま、世の中の
あるやうを見しり給へば、いとつゝましう、
心としられたてまつらんことはかたかるべう
おぼす。殿は、いとゞらうたしとおぼ

すべき心うちもなし
細 花 玉鬘の親にもしられ
いかなる心にてかあらん
細 花 哢 玉鬘の心中
きようげにて実父の親
まほのさくらのなかし
いかすらんあらん
花 いかならん世にか源の内の
おとゞに見えて思ひたつか
しんとするおひたちて
青柳 細 源青柳
なども玉鬘の親をしらず
うへをいとしるべき
孟曰
かくきこえたまへらん
哢 玉鬘の親にきこえさせ
こそはたてまつるべき
てんのちし源氏のまゝ世
なる人とこひおもふさ

くちけそうのあつくて
師夕恵八おもかけとなる
ることなく

しておもしろ　細　紫上の
御まへ源の思ひへおほす
ことしなへのあく
花の心の門へくは　細花
花見へ源の君のくゝも
ゆかしさのさかんを
そりてのすかしく　愚案也
のあはれにとゞめたるを
くと源の心のならけ
てのふかし　玉鬘方へまて
よ花の給ふ長八おもひへし
されと源の心しうる
き　細　かしこておもふ

ひさしのおましへみちとゞうつりおはしまし　源御心
おもふことうつしくてのあるさ御心もあはれ
憐いみじくのくおまうりけざまうすくぞ
ありしこのきくりのあはさ源をとうし
まぬべくけらかさらる御そへひろく
うえめさとくすまてとおれるとも
光よりのふくしかしもおはすよしさはん
ざ御をとえうりかまれは紫上らて花の
らうえ門へくはのこちまかろ
うくあくしもきらけさのとうそく
給くんてそとひかくれとの事ヘ心ぶもし
よのりしけるすやハおもへくそて

のくらくのこまふハいとあはれにて源ハあはれてうつくしくおもふ也又源ハ紫上へおもふらん心より
らくろうくしもうらしけ　細　紫上のそしまいてり源へおもふらくおなり
とのりしけ　細　源の詞也此所よりのこすとのまりふかしみゝの一愚按　我よ何のところ
りおちきとまるおもんとん紫上の好色のすみりのおふさまとりおもひてしほうふ御ふるもならの事なり
いそや紙こそも
細花　花源の君のけしき
我ともも姫の窓のまた
ゆしめしまれど又侍も
おくざやしを出おくら
ゆしのまうつく
いとゞおあらく源も心やうの
細おもふくくもさやうの
宮の心あるべきをしかし
いかにぞつとし　紫花の名の
べかく物かずくうれは源
の好色心ゆきのおもくへ
こまかへしかやうの宮
あるさ紀うこそにやさて
うしふく親ぶ母よよ
めとなく

へだ・いぞやうられまでもかくさきのひらく　紫詞也
うしのゆめとりしさ地りくるかりしれ
心ざ御の・ゆめりひいそうけるあはくみなく
やうし御く思ほそてゆめしまへハおれくはく　源心之歎
排さ著　ゆめいそうしてとも紫しまうなれいとこそ　源詞也
ことてすしをあらしらしてもすうつけれ　源のこゝろハ紫の心のうち
ぺのそひさしてむのうちよ人のうくをし　いつまでもんとこ
ちらのまゝみよもいつごえあるべくえんせと
ゆかりぞくれか門ハひかくえつがつゝら
ぬえぶたくろの類も・おひえうれ給ふらゝ

おもしろくて見るやうし
細 樂天句 河 文集十九
四月天氣和且清緑槐
陰合沙堤平なり

とりまうれるまくまきなくしらうて
おもしろくて
絵のくさ〳〵てまうの絵。めのくらふ
四月の香之
まろうすりのいとりのえさやうまう
ゆよつえ。れまへのまろうかえぐうしく
源の君の上に
ぎおしのおぼやりまえぐりおひそうふ
あまよえうくらうげるなる空と。こゝで
源の
しまの。くまして申ここうしとまで
すふくまへこのひあぐとのれさ海の。み
この姫君に
おひやうげる絵ざしうそくれてきいの
のひやうまりうまう。まうひなうし
あのうあし
でらうしげまくかまろと。ゆきさあうり絵
のくさざくひまうく月のくめあひいしれう

ことそあまてゆきつりし
源の初く出おろくを
納くらしり河へさのを似
いうりとも妙なつきりし
しらすり
中将のおもとに若き頃
細夕顔八葉上之八一向似
おりおぬかぎりよんとうふ
りのハ母よハ何ねぬよ為
ひされバらおきうくいよ
く夕良上よ似あひさう
らうそく
源ぐくまつり
師夕良上のうすを之ひ
おきまふなつり
播のうかりし袖よ
花ならくの夕良よ似
くをひうをと播を若
の袖の香よさしあう
よ比まうし師ゥ何う
身ともめ初しねとハ
おのかし母よりうて姫き

河 絢娜 又案
しるもやうまうけらくひのかげかしむうし
細夕良上を似より
めがしいぞくるてみをおつびひこくく。
くそめそてまろうしいとりくらえをれ
かし給さぞまえといしとおやさつくぐ
それうとおひまづくうてゆらくしこそ
夕顔之
おれ気るうわざ。夕ゥ中将のもし〳〵よ。
せうしぎ海のしおひふもとこそねあうう
ひよさしをかぬまのと妙なふまうるへ
とぬしまよふがなうてなぞさぐくこ
よよ元まで様之
まつうなとのみさおまうれくさけのくあっ
源氏
よ。よう花のあうとまさぐうく
あと
さら花の月あし袖まえつれいうえ

紬の書紙　何ハちらされ
へ〻ぶ人花ゝ人ごとのたゝき
へ殺は君をけまゐらせて
主盤木さ月より花
桃の色とうあいむらし
のへ乃紬の事をすゝ
細紙などは夕魚よはしれ
しまかわごとは紙源
あらりちまく紙へき
よしわり紀うくの絡
小源のうつるぬ流家
色の人ゝのふゆへあふ
ゆうするふまかく

まうみとゝを御目にかゝれ　よろしくかのゝ
おひまゐらせ　かうげゝくまゐらせ候まゝうつくしく
すくて　まづつゝし　ばさうくて　こひまゐらせ候
ゆかしめや　しのを　おひすゝ　そかばえゝしそ
思ふまじくれ　ぞ　うらむおよくれ
さ候とく人ゝまへ人れハ　女のやゝゆきな
らへし御なまりつゝ　ば　いゝしそ　殿がた
ゆれど　此かゝるかるさ御まそしのます
紬のかけまふうゝに　まらず　れのを
えらくぬ　紙かくをしれ　ひつりしと　おひ
てかりふまゐるさ御　いまゐらする　河かゝし
うけまゐらせ候のつゞくしとゝまゐらせ候

いとゝくまそくさへ　て
おほえ人の人とらめぬや
うまんをとうて思ひ
てあひおひまゝと　ゝまゝ
世のつく
あらくもおひせてまゐ
ぬるぶりよ　紀源のは
わびとそてもあさくハお
まらぬま紀あひおひあ
ふるゝバ又一しかるぶし
のうふづきとく

まゐらせ候つまのかたやうはらいらしげる
おもひまゐらせ候　ひかりの物おひそふらゝし様
ひとく　おふハそうし　おかゝし　ゆめしまゐらせ候
ひとく　女ハらくいつりをんと　殿がたて　まゐ
すりまゐけしきをもまゐらせ候へども　かゝり
うれしくまいらせ候ハ　殿がたひまうらいとま
くれぐれうつくへ　まゐらせ候　くべくまゐ
わりぬんのほどぞよろしけまいらせ候て　あひ
おひまへおさくも　おひまいらせ候　さやぬんぶし
よまさそふべくされバ世にまゐらせ候　ひかりまゐ
じまいらせ候　すらさばとゝつまゐらせ候ゆかり
人でよハ殿がたゆきすぐくやハあらいしと

うしろめたく　細 源須
まかりつゝをおもひし
づくづき人も恋しくねを
のみなくと源の自称く
異 源氏の御かさしのやう
たゝらいあらはしたし
いやゝて風の竹によせたる
哀 河 風生竹夜窓間臥
月照松時台上行
細 秘且清の奇句也
愚案 前よ前のうちかふ
つきらかあこうりのとおり
し前尾し
かんりしと須かなかりしかて
ともに 細 初著単衣与
軀肥 此句も文集同
詩の中の句し 花源の
君女君のきゝ給へる時
そじまをとうくふしを
づらりして女君まよう
かしまかし

かゝるところの人は世にありがたかるべく
さわがしかれど心うくのこそとの給ふ
いとさりそくしるきは御ゆやくむすりて霜いや
そし風のたけまうらはしき花やうまさしし
むさしつきうけおかしきよのきゝ海も恋め
やうるらよへじんこ海やうらうは御絹給よ
しとまりよきそしそらうくとしもかへ
ども涙よをまり給は中よすれどもくまし紙
ゆかしもあかりごさられどもよいかくの人
ぶつかくの御なさかうこうとやむ御かし
きゆどかる御そどりのけそんひいふとよ
しまきうりすべしのそでちりやうまう

ゆかしの殺の御あかり
弄上の句よとゆるしとの
殺ありともし源氏為
まりてくおもひまりし
くゞ又立うつりらそく
おひまつくお宰又内大
臣は御かるそうよ志まふ
るすはありともかうゞ為
の御おもひはありしと云
かうかんらくおもひまく

ゆそもすれ恋しくぬ人よ
細 花 花 女のうらひなざ
しあれば恋しぬ人は
そるまうど此等月むろ
ましくおもひきしを
ゆかしまかぬと源氏
のかくしみまかく

しもへしいはしらうくひとのおもんこ
ともめづらかよいろしうゆかにせゆかしの
ゆやの御あかりすくましりいゆるりよへ
そるすらまへとも。くさ海のうきこしは
おくましやとりるしこまよつむとそすれ
どこがれいぞつ。いとこころづかしきれ
さしさるれべからゆかにもそつくられも
てそるれ恋しくぬ人ぶよよのこしうりよ
てられゆかふすまさるかうをうくきし
ぬかむ小刀おしさまよかそうかんてそそま
つかやまよのそしまじかへさうぞこれから
おゐうらいりうらんいふかとこせなかし

まして〳〵なり
むつかしき海ちりや
夕顔の事あらひはよく
夕負より御くるしくおぼされ
なりけり
ゆくりかよ
河 不意 日本紀卒尓曰
思ひやりなきやうなる
心なり
まその人さまかられく
しくハ 古抄の人乃ち
やうはえしうかし事ハ
おもしろく 源の心ハの
切なるよしのおもて
そこねまじきぬ
河 そらおそろし 閑やハ
さりて山川のあらき勝
よりそれなく波やらそ

抄 好色のことの心にまかせての云也
物がゝりける心のつゝましかりし程とぞすぐさ
しつるをや〳〵て。哀げまよすつりしうさくこし
源氏
給ひし御心のうきやうなりけれひ
孟 夕顔の心也
はうかしき世のうしのこゝろきこえつるに。哀なり。
源の心
我れ心すぐしくもはかなりよあやしけき
ことなかりつるを。いかなるいとくはまし
そしつゝ人をあやしとおもふべかりけれいさ
うき契もありぞいつくまんひぬ。
孟 源氏の心 むかし
かの源をそく
ゝ給へぐはいところ〳〵くこそあるべかれよ
その人えうく隠でもくはあるぬかの
ぞよりざりすくぞそこなるさめくぬ仏ぞし
源をつくるまみえしとのすべく
すれど。ひとのとがしべききこ海なんともあ

いとさかりまへ
花 さつけの心ぞやゝあきう
くとのかれとハぞもさう
しとなり
河 ゆめなしき
細 花 ゆめもくのほる
やしまれのふくきを
せなひそとのん
もてしらするれらう
細 夫方の世の人乃なう
ひ男ろぞよろすれ給ね
づきらのへうけるくもむう
づくへ未知しきの事ねとぞ
抄 弄 男ハりしくうり世
んなさんて。ぞ上よあつ
ねの男女恋ぞ人のいへ
ころもらしつまあるぬと近
られりりくもらぐさ
抄 宣字のらんその此上まある

孟 夕顔の心也
らし。むすりしてひしくさかりぐさあまぞう
なきこともおかしく思ふかしこころよりさ
匈あたじものへといふとも海やうなるとしる
花の抄之
へど。我れにしもあらぬさ海てぞいつうしと
源心
物がひしかれはいとさそりなりにいさまそては
つゝぬ流れんぞ人をもいとこゝろすくもおもく
まこべうかりけれども。すげさまあひたる
細 世の中をいふまさきもりまちぬし
くうくいとくていぞあひぬ。女君も流とし
こそもなくしのひまうつほどすれば世中と
もり侍るぬ中のかもそそこしうしすれど
お人のおりさ海ぞうまこえり侍るのは
られよりけれうちさ海ふとものかうし

みけしきおもかげ紀とも細注
うらとけうら本ともと云
さうなるひまなく
とのくれそしきの
さうり無事君など源の
身心いたつく謂ころざ
しありと仮用し

おわしけるぬるなげなくさ
りそふかし性の給へ
家文もうあどはんのつう
ぬ冊ずくかりそ午一給へ
しとく

ぞ。まどひのありかもおどろかせられとおぼげりしを
ういとやしきをおしなれば、いとどはらからや
まづけまそしおぼえりてはらからず此の色。にの
此はさしきのことやうなうこゝろざしけすくを
おもしろさまうれはらしとのはぢやうとうさーせ
ときはしうれりそうのはかなしうくぬるを
かくえ。りてなしとてゝ経けども。さや
みもとをあのびくさでもうまつけていと
かすらんば。ふつきするはしんのありさ海さ。
うしおしう思ひそて経りも。男ぞんうう
つまきろ。かさのおしさゆ文とくおうろや
しかりてかりまへれど。人くれきうらりなど

うらとけて　御かへりかう
ねよるまことわりなきを
人の強ぐんなりとしそ
やす細宗義もなうき
とのふし花得もさぬへ
きのねと歌わりなれ
まさへさうむとがうさ
いおぼろのきやとませ
とし男一のるようなを
けてと云てしきとがうさ
と云給りるく侍く

うけとまうりね細おう
つこの文の御こ只の事
いよりまつく字こし

まりてはくりとくとあやゆれば。ゆかりくまり
とのふるさとのうぐひすおいりてよ。ずく
ぐしさまいとめでたうおもふ。らびひ
あかりしはぎしさこそつまうしもわきれ
ぐうつ。いつまへ人めんすりせん
うらとけくねとさぬ物をわりなきこと
とおりがやよむをけぬかりん。おさなくこ
そうのしあひそれとさまかはやがり
さらけ文案をいとようしとぞまでばかり
ことさらにざしんも人めもしげればゞ
つくりなすうちのくまぐまはなほうけ
さ海のりね。もうりぐらのおもしう給はれば

らうらう所あるらんといふまふ
師 名がたりハ只物かたりゝら
なるなりまたりしおな
まきハうどあかりあるなゝし
よ面の松 細 花紋ゑ面白
ゑうく。意得ぬ物やうの松
のみちハみのにいでゝや
あわんといふましき花山
らんハをうやむそよきと
いふハ夜ハなをさこそよい
ゐるを物語にはあし給
つへ物もりせしろうとを
くとらつう物りしろく
ならり。彼方ハ六帖みも
綢繆集みも宝之集
みもわりとえく 孟此
行ハいまゞあかぬ附お
おうせしより附のもと心
みなり
とのゝ君たちへハ
源の好色を思らう
人々をもくかへて

孟 此ゑあけつらうて源の心を
おほしうせぬとのとわかやうのまかりさき
はざさすがたまするまりと深くおもへる
らさ所あつらうしまふをうそわらけれん 孟 茶子地し
れ。いつまむつかしきのらいかほきさま 源のく
川のとおりそせさこしをすくむつりしく
さこしまふしとおかれれば。いとゞ所をきさむ 君のへて
らうそ。ざさ所るさ地ゑひつきていとるや
おうきんしのふくてこしのんそうへハ おうつゝのおかげをくて
もくあうて。ざうしくさもえくしきもぴげ 細 定へのおほやけ
源のおこなひ 又と人ハそうて
のかやゞ海よゑうひおしろとぞうやうの 物 源のおうつゝみん
うりみのうすく
うしきぬりいづゞくかいりけうへわしそれ
ようさ名ふとあつゝさんちれ。ちく地らぶよみ 内府のく

またくしくきれんおも
思様 あ紫の世まよふそ
行くまようにゆかりハ内府
へまうれなりそてもを
ぢうみさきやすれバ主
実まさお思まおわりごさえ
しぞうよよまよりうれれ
いゆれくしきやうくよ内
府のゆかがさんとく 思ふ
ふれぞそて物かたらん
紫をと源のふやうつみて
とさまあかいハ内府みも不足
後よ物がもぐへしろうに
そちのろうどとさくまつ
されバーまとことゞて物や
きんとえらくや
しうらのよやそげあるう
細 物がらの名めくにも
ひさぶられおとて
又みおもまとくハ 孟 無よム
紫黒くし ゆ 又おざとそき
しう入さぜにかまさうのはらぐのかどを源の心くのてしあまよゆ人なり
思ひの中将 細 落ばりうのぬしうとぞいひとハけしきなり人すじ源の行ろ思し
をは中将とかばハ此の行くなり 師 其表紙まてをかとどの御ゆるしをかのきてとおち

とのゝ君ちもうちまかりて。もまいりくるき
れんぐんぶとあつしきしん地りしくまして
いとわはつけうをらそう。あわりさんとしく。 なり
しろけよやすげるうあがりしそうぐのぶ大
ねるをどハとのゝはる気色りてえそれぬ海 文大将とゐるもかげなく
よつうへ中はまひそ。いと物へどうらはそうと 世
あふこのいえりの中将もかとゞのはゆかし 柏木を
とそてさそ。たゝかうは月の空にて。御の心 細 一方ひきまく
ぢとハゑれよてひとへあうれしくてかお
まうしきさてまひあうそめり

まことのおやぢとハしらざれバ　師　玉琴と実ハ兄弟なるをしらで深の中なりしを
うらみしくゆめのよとなり